

## 第28号

# 札幌交響くらぶ

発行／札幌交響くらぶ  
 (財)札幌交響楽団内  
 札幌市中央区中島公園1番15号  
 (札幌コンサートホール内)  
 電話 011-520-1771  
 F A X 011-520-1772

## 第6回札幌交響くらぶコンサート開催

### 本年度1回目の交流会も



©Masahide Sato

第6回目を迎えた札幌交響くらぶコンサートが、今年からは札幌の自主公演の一つとして、札幌交響くらぶと札幌の共催という新たな形で、4月17日(土)午後5時から札幌コンサートホール・キタラで開催されました。

昨年に続き、指揮者には西本智実さんをお迎えしました。相変わらずの人気の、ほぼ満席の聴衆でした。竹津宜男さんの司会でドビュッシーの「小組曲」で始まり、毎回好評の「指揮者にチャレンジ」のコーナーでは、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」の第4楽章冒頭にチャレンジしていただきました。

西本さんのご好意で、5人の予定を上回る、順に森明音さん(10)、清水優里さん(17)、三戸直哉君(11)、池田風花さん(13)、佐々木陸君(9)、山田朱里さん(18)、渡辺有里沙さん(9)の7人の方が札幌を指揮しました。きっと、一生の思い出になることでしょう。

後半は、チャイコフスキーの交響曲第4番の迫力ある演奏で、聴衆の皆様にもご満足いただけたことと思います。

終演後、ホテル・ルーシス札幌に場所を移し、本年度第1回の交流会が開催されました。上田会長の挨拶、西本さんの乾杯に続き、来賓として札幌の佐藤光明専務理事、国会議員で札幌交響くらぶ入会第1号となつて下さった衆議院議員小林千代美さんのスピーチをいただき、歓談となりました。

楽員さんとの歓談、西本さんとの記念撮影など賑やかな中、トランペットの前川和弘さんの司会により、パート別の楽員さんの挨拶も行われ、会員の皆さんも大いに楽しまれたようでした。

来年のコンサートも、今年に負けずに盛会となるよう頑張りましょう。



札幌交響くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

# 指揮者に聞く

札幌交響楽団音楽監督

おたかただあき  
**尾高忠明さん**

札幌はもつと大きな  
オーケストラに!!



©Masahide Sato

## 尾高忠明さんのプロフィール

1947年、作曲家・指揮者尾高尚忠の次男として鎌倉に生まれる。桐朋学園大学で斎藤秀雄氏に師事。卒業後N響を指揮してデビュー。ウィーン国立アカデミー留学後東京フィル常任、札幌正、読響常任、BBCウェールズ響首席、紀尾井シフォニエッタMA・首席の各指揮者を歴任し、98年札幌MA・常任指揮者に就任。

国内の主要オーケストラは勿論、ロンドン・フィル、BBC響、バーミンガム市響、ハレ管、ポーツマス響、ヘルシンキ・フィル、ロッテルダム・フィル、ストラスブル・フィル、バンベルク響、ワルシャワ・フィル、オスロ響、ベルゲン・フィル、メルボルン響、シドニー響、オレゴン響、香港フィル、ロンドン響等に客演。着実に日本人指揮者のリーダー的存在へ歩を進めている。

サントリー音楽賞を受賞の他、ウェールズ音楽演劇大学名誉会員、ウェールズ大学名誉博士号、大英勲章CBE、エルガー・メダルを授与されている。

今年4月からは東京芸大非常勤客員教授に、5月からは札幌音楽監督に就任。

3月21日、芸術の森でのスペシャルコンサートの練習当日の休憩時間中に、2004年度の定期演奏会の聴きどころなどについて常任指揮者（当時）の尾高さんに伺いました。

—— 2004年度の定期演奏会のプログラムの意図というところからお聞かせ下さい。

尾高 いろいろな考えがあるのですが、まずはドヴォルザークの記念の年ですので、ドヴォルザークを可能な範囲でたくさん入れてみようということで、「新世界」をスダーンさんにやってもらったり、高関さんとかいろいろなドヴォルザークが入ってます。「フス教徒」のような珍しい曲も入ってますし、もう一度ドヴォルザークに目を向けようということが一つありました。

また、客演の指揮者の方なんかは、それをあんまり無理強いするとその本人の良さが出ない、せっかくですからその客演の指揮者を含めた皆さんに「ご自分がなりたいものは何ですか」ということをまず伺いました。そうすると、例えば大山さんはずっとブラームスでこことこ続いて客演していらっやって、それがとても好評だということで、これはもうブラームス以外あり得ないという具合に、なるべく客演される方々の良いところを出してみたいということを中心にしました。例えばボッセさんの「モーツァルトの三大交響曲」なんていうのは、こんなのを聴けるというのは札幌の人はさぞ幸せなことだろうと思います。

もう一つは、ハイドンも入れたいということで、高関さんがこの間もやって下さいましたし、これからもたくさんやっていただけるので、私は、2005年に向けて札幌に大きなオーケストラになってもらいたいと思っていますので、大曲を常任である私がやらなければいけないかなということで、マーラーの6番とブルックナーの8番、それとショスタコービッチの5番も大曲といえば大曲ですから、その三つをやらせていただくということにしました。

そこで全体を見た時に、一番困ったのはフランス物が全然ないというのはまずいということで、ちょうど金聖響さんが9月に振って下さるということで「フランス物をやっていただけですか」とお願いしたら、喜んでやって下さることになりました。もしかしたら、もう少しフランス物があってもいいのかもと思いますが、全体をドヴォルザーク・ハイドンと、お得意なもの、大曲という構成でネジを締めたので、この回だけちょっとリフレッシュしていただく、という感じだと思ってお

ります。

—— 毎回素晴らしい演奏会になるとは思いますが、これはお勧めというようなものがありますでしょうか。

尾高 どうしても大曲の方に注目が集まると思いますが、私としては、ボッセさんの「三大交響曲」というのはオーケストラにとってもすごく大変ですが、さぞ実りある演奏会になるだろうと思います。それから、若手の下野さんが大変どこでも好評ですが、その好評な下野さんがポピュラーな曲を並べてくるかなと思ったら、そうじゃなくて、なおかつ実際に聴いてみると非常に分りやすい曲で、その上に廣狩君と一緒にやるということで、一般の方がこのプログラムを見た時に「これ行こうかしらどうかしら」と迷う人もいるかもしれませんが、これは是非来ていただきたいなと思っております。

—— 各回にタイトルがついていますが。

尾高 これは私が考えた言葉ではないのですが、私自身読んでみて「あなるほどな」と思うところもありますし、良いイントロダクションになっているかなと思いますし、こういう配慮もとても必要なことだと思います。

—— 常任・正指揮者が3回ずつということについてはいかがでしょうか。

尾高 例えば常任一人しかいないというオーケストラの場合でしたら、常任がもっとたくさん振るといってもありましようが、私たちは二人でやっていますから、こういう回数になるのは私が考えるには、非常にノーマルであると思います。声としては、常任がどうしてもと振らないのというものがありますが、ご存知のように2005年度からは定期が10回になりますから、二人で6回ですから残りが4回ということになりますので、定期3回、名曲シリーズ1回という回数は守っていきたいと思っています。

—— 定期以外では「ポップス」と「シンフォニック・プラス」がありますが、これは定期的が続くのでしょうか。

尾高 それはまだ分かりません。まず「ポップス」は2回目ということですが、前回やったのと同じようにやるかという、少し変えなくちゃならないだろうと思っています。趣旨はもちろん同じですが、2年間やってみた結果を見て、来年以降どうしようかと考えてみたいと私自身は考えています。

「シンフォニック・プラス」の方は、とても大事なことは、今、日本はプラスが非常に盛んなんですね。クラシックの演奏会の中にいる人はあまり知らなくても、プラスの世界

というのは非常に活発でして、プラスの人達との協演や交わりということがこれからは不可欠であるということは私も感じてますし、東京でプラスを振ったこともあります。そういうような接点を、これからずっと求めていこうと思います。ただ、この「シンフォニック・プラス・コンサート」という形ですと続いていくかということ、これも手探りで一つずつやっつけていこうということになるでしょうね。でも、やはり、クラシックの曲ばかりをやっているだけでは、もう21世紀はだ



めだと思いますね。

—— 特別演奏会では、それ以外に東京公演が2回ありますね。ファンとしては道外の公演ももっと増えればと願っていますが。

尾高 札幌は上手くなってきているのに、何より札幌の方がそれを知っていて下さらないという面がありますよね。逆に、札幌でこういう演奏をしたということが噂で東京とか大阪にいろんなところで聞こえてきています。例えば、この間のエルガーの演奏会の時にも、東京から随分たくさんの方が聴きにきていて、その人達がしゃべるのが口づてで伝わっています。それで「どうしてもっと東京に来ないの」ということは言われていたのですが、ホクレンの東京公演が3月ということですからずっと続いていましたので、前からずっとお誘いをいただいていた、すみだトリフォニーホールがこの「地方都市オーケストラ・フェスティバル」と時期が重なっていて出演出来ないでいました。トリフォニーホールに行く度に係の人などから「どうしてもっと東京に来ないの」と言われていたのですが、今度、ホクレンが秋になったことによって、両方可能になりました。年に2回も、という方もいるかもしれませんが最低年に2回は東京公演をやるということを続けることによって、本当の札幌の定着した東京のお客さんが増えてくるんじゃないかな

と思います。できれば、それを大阪とか九州まで行って、全国区でお客様が増えて、そういう人達が「今度はこの音をギターで聴いてみたい」というようになったらと思っています。また、札幌くらすの皆さんも、東京公演に行ってみようとか、もし海外公演があるような場合は、聴きに行ってみようというようなことになれば良いなと思っています。

—— 大きなこととして、2005年度から、先ほどお話がありました、定期公演の2公演がよいよ実現しますが。

**尾高** 私は就任した時から、定期を2回にしてほしいと言ってきました。世界中のほとんどのオーケストラが定期公演を2回やるんです。それは何故かということは、お客様の立場からの理由もありますが、音楽家の立場からお話しますと、例えば、マーラーの9番という



ような大変な曲を演奏して、1日で終わってしまうと、その後3年やらないと忘れてしまいます。それが、2日間やることによって、完璧に自分の身につきます。そうすると、3年たっても忘れません。例えば、初めての道を1回歩いて、「さあもう1回行きますか」といわれればなかなか行けませんが、2度歩いてどっかの家にたどり着いたら、まあ、ほとんど行けるといふのと同じように、演奏も全然違います。

2回やることで身につくとともに、2回同じにやろうとしても、微妙に違う音楽になります。その違いが分りはじめると、N響や仙台フィルでもそうですが、お客さんが初日良かったから2日目も聴きにいこうと当日券を買ったり、もしくは両方の定期会員になっている人がいるくらいです。初日と2日目というのは、わざとやっているのではないのですが、どうしても演奏は変わってしまいます。

私としては、2日やることで最初は集客の面でももちろん大変ですが、2004年度もご存知

のように、練習を公開したり、オーケストラとしては2日本番が出来るような体制をだんだん取って行って、2005年に結びつけたいと思います。それで、2005年からはやっと一人前のオーケストラになってくれるのかな、と思います。

—— 少し先の話になりますが、武満さんの没後10年に何か企画されますか。

**尾高** 2006年2月が10年目に当たりますので、そこでオール武満プログラムをやりたいなと思っています。

東京でも「札幌はどうして武満を持って東京に来ないの」と言う人はいます。どうしてかっていうと、武満さんが札幌を愛していたということが記事として残っていますので。東京公演はどうしてもポピュラーなもの、お客さんが入りやすいものということになってしまいがちでしたが、今回初めて、マーラーの6番をやりますが、これだけ大きなものなら武満さんが入っても、という訳で入れることにしました。

武満徹さんという方は、晩年に非常に売れて、作曲依頼が何年も先まで殺到していて、世界中での演奏回数も非常に多かったのですが、お亡くなりになった後、私は相変わらずやっていますが、世界的にも演奏回数が一時ほどではなくなってきています。そんな中、私はこの10年という節目で、もう一回武満さんという人を皆で聴いてみたい、と思っていますので2005年度の演奏会では、武満特集を入れるかもしれませんし、相当の回数のところ武満さんを入れるかもしれませんし、まだ実際の計画段階ではありませんが、そんなようなことを考えています。

—— 最後に、札幌とギターの関係という点に関してはいかがでしょう。

**尾高** ヨーロッパなんかでは自分のホールを持っているオーケストラばかりですが、それはオーケストラ文化の歴史の違いで、日本は随分頑張っただけ追いついてきましたが、自前のホールを持つまでには至っていません。ギターに関しては、私は札幌はギターを使って録音をする使命があると思います。それで私が今提案しているのは、ヨーロッパのように、一日に練習、録音、本番、そして夜は別のオーケストラの本番というような運営をということなのです。例えば午後4時からあるオーケストラが使うとすれば、それまでは札幌が録音で使うというようになればと思っています。そうなれば、札幌にとってもギターにとっても良い結果になると思います。

(田山登代美、佐藤紀子、佐藤良次)

## 亡命音楽家 ①



亡命音楽家。響きは良くないが、優れた音楽家が世界中に散らばって定住したお陰で、今日アジアでもレベルの高い音楽が楽しめるようになったのである。

最初は、ロシア革命で国を追われ海外へ逃れた、白系ロシア人と言われた音楽家たち。「ピーターと狼」の作曲で有名なプロコフィエフも、短期間日本に滞在し、ピアノ協奏曲第3番の3楽章の中に「越後獅子」のモチーフを使っている。同じ頃来日した大物演奏家の一人は、札幌の初代常任指揮者、故荒谷正雄氏のヴァイオリンの師匠アレクサンドル・モギレフスキーで、1953年に東京で亡くなるまでに諏訪根自子を始め優れたヴァイオリニストを育てた。ピアノのレオ・シロタは園田高弘などを育てた。

次に大挙して亡命したのは、ナチスに追われたユダヤ人アーティスト達で、主にアメリカにわたり広く世界で活躍した。

1960年代、東西の冷戦が激化し、鉄のカーテンの向こう側で反体制と見られた人やユダヤ人への締め付けが厳しくなり、音楽家の亡命が続いた。

1985年10月から3年間札幌のコンサートマスターを務めた、ラトヴィア出身のマイケル・キン氏もその一人だった。

「他の人に迷惑を掛けるといけないので」と前置きしながらの話によると、妻子と共に観光の名目で国外へ出たそうである。幸運にも楽器を持って出国、その後、オーストラリアのメルボルン交響楽団(MSO)のコンサートマスターに就任したのだった。

札幌は、MSOからキン氏を3年間借りることになった。プールもある広大な屋敷から、単身赴任で札幌の9畳半一間のアパートに暮らすことになった。

「こんな狭いところでごめんね」と謝ると、「一般的なモスクワ市民だったら、これくらいのアパートに9人が暮らさなければならぬ、僕はまだ王様だ」と言ってくれる心優しい男だった。

演奏旅行先の茨城県犬洗町でのコンサートが振り出しでメルボルンから直行してもらった。

遅い時間に一人で水戸駅へ到着したキン氏を迎えて、二人で鮎屋へ入った。小さなまな板の上に出された鮎を眺めるだけで食べようとしな。食べられないのかと顔を見たら「あまり美し過ぎてお箸が付けられない」とつぶやき、マスターに促されてやっと食べ始めた。日本人的な繊細な感情の持ち主だった。

(竹津宜男)

from 「札幌くらぶ」

### 平成16年度札幌くらぶ総会開催

年に1回の本年度の総会が次の通りに開催されます。会員の皆様のご出席をお願い申し上げます。

日時 平成16年6月5日(土)午後5時より

場所 渡辺淳一文学館(エリエール・スクエア札幌)

中央区南12条西6丁目 TEL 551-1282

鴨々川を挟んで、キタラの隣です。

議題 15年度の活動・決算の報告と、16年度の活動計画、予算案の審議のほか、会則の一部改正案審議や役員改選等が議題となります。

総会終了後、札幌メンバーによる室内楽のミニコンサートが行われます。どうぞお楽しみに。

## PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ヴィオラ奏者

はしもと じゅんいちろう  
橋本 純一郎 さん

札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

はしもと さちこ  
橋本 幸子 さん

### ご出身は

純一郎 生まれは東京ですが、父の転勤の関係で、高校卒業までは静岡県で育ちました。

幸子 生まれは福岡ですが、私も父の転勤であちこちに行って、小学校2年生からは東京でした。

### それぞれの楽器になった事情を

純一郎 父が音楽を趣味にしていたせいか、小さい頃からヴァイオリンを習わせられていたのですが、男のくせに格好悪いという意識もあり、あまり好きでなかったのです。むしろ運動が好きで、あれこれやりましたが、あれはだめ、これはだめ、という消去法で消していっているうちに、自然にビオラになっていたという感じですね。

幸子 両親は音楽はやっていなかったのですが、小さい時から歌ったり踊ったりするのが好きだったようで、音楽が好きそうだからとやらせたみたいで、具体的に楽器を与えたのは母でした。本格的にヴァイオリンを習い始めたのは8歳からでした。

### 札幌入団のいきさつは

純一郎 私は、最初は普通の大学に進学して、大学のオケでやっていて、それから音大に入り直しました。ビオラという楽器ということもあり、音大に入学する時から将来はオーケストラで働こうというふうには思っていました。卒業する頃に、たまたま札幌のオーディションがあって、卒業して最初に受けました。そうしたら運よく合格出来て、まあ、新卒で入団したという形になりました。

幸子 私の場合は……、

純一郎 同級生です、音大の。

幸子 年は大分違うんですよ。

純一郎 交際していたものですから……。



幸子 生活が成り立たないと…、(彼は)入ったばかりですから、私の場合は学校のオーケストラの仕事をするということが決まったので、すぐには行けないという事情でした。

純一郎 まあ、ぶっちゃけて言えば、親の説得に1年かかったということですね(笑)。

幸子 北海道には憧れていましたから次の年にオーディションを受けることになりました。

純一郎 あの頃、「北の国から」とかありまして、結構北海道に対する憧れはありましたし……。

幸子 二人とも自然が好きだったり、食べるものも好きだったり、というようなこともありましたね。

### 奥様から見たご主人は

幸子 とにかく音楽が好きですね。好きだからここにたどり着いた、という感じに私は見て思うんです。研究熱心ですし。

### ご主人から見た奥様は

純一郎 テレビ、それもドラマが好きで一生懸命見えていますね(笑)。

幸子 あ、それ言うのやめて!

### ずっと札幌に とお考えですか

純一郎 そうですね、環境は最高だと思いますね。ただ、音楽の上で最近悩むことも多いものですが、出来ることならばここで一生を過ごせたら、とは思っています。

幸子 大事なことは、いつも自分が努力しているということですから、いろんなメディアも発達していますし、いろんな演奏家の演奏も聴けますし、環境としてはここは本当に素晴らしいと、私は思っています。

## ところで 北海道での生活は？

幸子 想像はしていましたが、こんなに寒いということは体験したことがなかったので……。最初の冬は熱が出たりしました。

純一郎 彼女、毎年転んでますよ。

## 雪捨てはどうですか？

純一郎 最初の頃はむきになってやっていたけれども、年がたつにつれてだんだん考えてやるようになりましたね。無理しないでゆっくりとかです。

## 道内巡演での思い出は

純一郎 とにかく、食べ物がおいしくてびっくりしたということがありますね。

幸子 それから、温泉がいっぱいありますよね。

## 今年の北見の猛吹雪の時は

純一郎 あれは大変でした。でも、結構いろんなことがありますでしょう。釧路で地震の直後に行ったりとか。そういうのは、結構ありますよ。

幸子 いろんなことがありますが、地方に行くことは結構楽しんでますよ。

## 食べ物でおいしいものは何ですか？

純一郎 海産物も畑のものなんでもおいしいですよ。私は、北海道に来て、色々おいしいものを食べて、逆に、離れてみて静岡のおいしいものも分ったという気がしますね。

幸子 それは言えます。私もそんな気がします。

## 音を出すので 住居には苦労しませんか

純一郎 マンションにしばらく住んでいた時は、結構気を遣いました。

幸子 今は、芸術の森の近くの一戸建てに住んでいて、レッスン室と呼べるほどのものではありませんが、音を出せる部屋を作りました。確かに、気は遣いますね。

## 交替でお使いなのですか

純一郎 そうですね、一緒に弾くということはまずありませんし、率直に言って私の専用のような状態ですね。

幸子 確かに私から見ても、こんなにも、と思うくらいすごく練習するんです。

純一郎 私は練習が趣味みたいなもので、本当に好きなんですよ。一日中でも、弾いていられるというか、苦になりません。

幸子 私は、この人が一生懸命練習したり研究したりした結果を、「あ、そうなんだ」と頂くことにしています(笑)。

私はすごく不器用なんです。だから練習しなきゃとは思いますが、帰るとついつい疲れたなと思ったりして、助けられています。

## 女性は家事があつたりして大変ですよ

幸子 でも、私はあまり……。

純一郎 どちらかと言うと、私の方が主に担当していますね。気が付いた方がやっちゃいますよね。買物なんかでもね。この人は気が付かないし、またそれが苦にならない人ですね。

## 将来への夢 希望はありますか

純一郎 私はね、死ぬ日のその朝まで弾いていたいというのが、最近の目標ですね。そのために、年を取っても衰えないようにと、体力作りだとか演奏法だとかを日々研究しています。



幸子 私は、音楽は、優れた作曲家がいろいろな感情とか場面とかを音符に託してあると思うんです。そういうことを自分が感じ取れるように感受性を磨いたり、表現出来るように技術も磨いて、一生かけてヴァイオリンで表現できれば、またそれで人に感動を与えることが出来れば、と思っています。

## 最後に 札幌くらぶの存在については

純一郎 いや、本当にありがたい限りだと思っていますし、くらぶのコンサートも年一回ではなく、もっとやってもらいたいとも思います。いろいろなアイデアで逆に事務局に刺激を与えてほしい、とも思います。

幸子 応援して下さる札幌くらぶの皆様がいて、本当に心強く思っています。

純一郎 そうね、例の危機の時に一番心強かったのは札幌くらぶの存在でしたね。

幸子 やはり、生身の人間ですから、不安なまま弾くのと、心強いと思って弾くのとでは、気持ちが変わりますので、本当にありがたいと思いました。

純一郎 本当に、今、考えると、お陰で助かったようなものですから、ありがとうございます。

(田山登代美、佐藤紀子、佐藤良次)

## 月々 東京公演追っかけの記 月々

3月25日午前11時、西川事務局長ご夫妻、田山さん、武藤さん、佐藤夫婦の6名が新千歳空港に集合し、男女各3名による追っかけが開始されました。

13時東京着。途中新橋で昼食をとり、2泊3日の拠点東京全日空ホテルに到着しました。ホテルからはサントリーホール前のカラヤン広場に直接出られる立地の良さですが、すぐ裏手がアメリカ大使館ということで、あたり一帯は何メートルかおきくらいに警察官が立つという厳戒態勢に驚かされました。

さっそくホールに行き、23日の札幌公演を急病で高関さんに交代された尾高さんが出演されるのかどうか確かめることにしました。予想通り高関さんのこと。尾高さんの容態を心配しながらも、高関さんの指揮に期待することにしました。

18時30分、開場とともにホールに入り、6人並んで座っていると突然上田会長が出現、一同口あんぐりで「どうしたの?」「や、や、や、ちょうど東京事務所への出張が入って」とのこと、終演後も東京事務所のスタッフと懇談の予定とのこと、驚きながらも来てくれてよかったと一同喜びました。

いつものようにニキティンさんもいて、皆と握手し「4月3日に札幌でリサイタルをやるので聴きに来てね」とのことでした。

コンサートは、前半のモーツァルトの41番の時にはちらほら空席がありましたが、後半のマラーの1番の時には満席となり、札幌もその熱気に応じて熱演しました。特に、高関さんは2曲とも完全暗譜で指揮をし、満場の聴衆の大拍手を受けました。尾高さんの指揮に期待して来場された方も多かったと思いますが、高関さんはそういう方々をも満足させ立派に尾高さんの代役を果たされたと思います。

終演後、楽屋口に行き、楽員さん達や高関さんに「お疲れ様」と声をかけました。楽員さん達も、この日の出来に満足だったらしく、皆さん興奮で顔を紅潮させていました。

その後、お決まりで、ホール前のワインハウスに場を移し、楽員さん達とワインを楽しみながら歓談となりました。女性陣は、同じ店の奥で食事することによって二手に分かれましたが、歓談を終わって、女性達のところに行くと、衝立で仕切られた背後の席に上田会長一行が懇談の最中でした。女性達も上田会長もずっと気づかなかったということで、逆に

びっくりで、皆で大笑いになりました。会長も合流して、しばし歓談となりましたが、翌朝一番の飛行機で帰るとのこと、すぐにお開きになり第1日の日程は無事終了しました。

翌朝、男性陣は和食、女性陣はビュッフェの洋食と別れて朝食をとり、食後に合流すると「スマップの草薙君がいて、お話をした」と女性陣は中年おばさんそのものはしゃぎようで第2日が始まりました。この日は「せっかく東京に行くのだし、ホテルから歩いていけるのだから、ぜひ国会の見学をしよう」ということになっていて、札幌のパトローネージュになって下さり、札幌くらぶにも入会して下さるといふ衆議院議員の小林千代美さんにあらかじめ見学の仲介をお願いしていました。

午前11時前に衆議院第2議員会館の小林さんの事務所に到着。しばらくして、小林さんが会議から戻られ「この後別の会議があるので、昼食の時に合流します」とのこと。秘書専用の衆議院通行証を全員に貸していただき、秘書の鬼ヶ原さんの案内で見学ということになりました。議員会館から専用の地下道を通して、直接国会議事堂に入り、本会議場など一般見学者の見学場所はもちろん、普通は見学できない予算委員会が開かれる委員会室で総理大臣席に座ったり、議院運営委員会が開かれる委員長応接室などを案内してもらい、貴重な体験をしました。

昼食は議員食堂で小林さんも合流していただき、その後、議事堂前庭などで記念写真を撮って見学を終わりました。



午後は柴又に行き、「寅さん記念館」など寅さんの世界を満喫して日程を終えました。

最終日は、自由行動として、夕刻に羽田空港に集合し、新千歳空港に向かいました。

皆、口々に「楽しかった。10月の東京公演にも来てみたいね」と言い、実り多かった東京公演追っかけを終りました。(佐藤良次)

## 編集後記

インタビューの時には元気一杯だった尾高さんが急性胃腸炎ということで驚きました。お元気になられて何よりでした。

札幌くらぶコンサートも成功裡に終了しました。会員、スタッフの皆さんお疲れ様でした。来年も頑張りましょう。(佐藤良次)